高崎市文化情報誌

劇場都市

2016 vol 00

Takasaki Cultural Information Booklet GEKIJYOTOSHI

創刊準備号

高崎シティギャラリー公演情報

主催　公益財団法人 高崎市文化スポーツ振興財団

［チケット取扱］027-328-5050

高崎五夜シリーズ 第5夜

暗愁の香気を放つヴァイオリン界の新星

郷古廉ヴァイオリンリサイタル

2016年3月4日(金)　午後7時開演（午後6時30分開場）　全席指定2,000円（友の会1,800円）

出演：郷古廉（ヴァイオリン）、加藤洋之（ピアノ）

プログラム

ウェーベルン：ヴァイオリンとピアノのための4つの小品

バルトーク：ヴァイオリン・ソナタ 第1番

J.S.バッハ：ヴァイオリンとハープシコードのためのソナタ 第5番

フランク：ヴァイオリン・ソナタ イ長調

アフタヌーンサロンシリーズ vol.4

濃厚な情念がほとばしる鬼才

佐藤久成ヴァイオリンリサイタル

2016年3月7日(月)　午後2時開演（午後1時30分開場）　全席指定2,000円（友の会1,800円）

出演：佐藤久成（ヴァイオリン）、松原聡（ピアノ）

プログラム

ヴィターリ：シャコンヌ

ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ 第9番「クロイツェル」

サラサーテ：ツィゴイネルワイゼン 他

劇場都市 2016 vol 00

発行日：2016年2月1日　発行：公益財団法人高崎市文化スポーツ振興財団 tel:027-321-1213　制作：株式会社グラスロード社

Artwork by JONJON GREEN by Youta Matsuoka

群馬交響楽団創立70周年

止まることなき創造への挑戦

The continuous challenge on the creation

群馬交響楽団の70周年記念演奏会メイン公演が11月21日（土）に群馬音楽センターで行われた。群馬交響楽団・大友直人音楽監督の指揮、ヴァイオリンに諏訪内晶子さんを迎え、芥川也寸志／交響管弦楽のための音楽、ベートーヴェン／ヴァイオリン協奏曲ニ長調、デュティユー／交響曲第1番が演奏され、満場の来場者を魅了した。

世界から高崎に、高崎から世界へ

終戦まもない昭和20年11月、戦争で荒廃した高崎を音楽で潤し、文化の復興をめざそうと群馬交響楽団の前身「高崎市民オーケストラ」が発足した。消防団詰所や呉服店の2階で練習し、翌昭和21年3月10日、第1回定期演奏会が高崎市立高等女学校の講堂で行われた。楽団員は十数人で、国際的ピアニストの草分けとなった原智恵子、戦後のオペラ界を担う声楽家大谷洌子を招き、会場は超満員となった。

昭和22年から小中学校を訪問する「移動音楽教室」が始まり、当時大学生であった小沢征爾も指揮をした。昭和30年に封切られた映画「ここに泉あり」では、貧しさに苦悩しながら、音楽で人々に希望を与える群馬交響楽団の姿を岸恵子、小林桂樹、岡田英次らが名演し、全国に感動が広がった。

群響を設立した井上房一郎は都市に「一つのフィルハーモニーと一つの音楽ホールを」、丸山勝廣は「高崎を日本のウィーンに」と、芸術文化都市・高崎の姿を描いた。

芸術文化都市高崎のシンボル「群響」

群響70周年記念公演を終え、コンサートマスターの伊藤文乃さんは「草津国際音楽アカデミー一期生として参加した思い出がよみがえりました。今日は、群響の歴史の重みをかみしめながら演奏しました」と歴史の節目をかみしめた。

大友直人音楽監督は「70年にわたってオーケストラが活動を続けることは決してやさしいことではありません。市民、県民に支えられたことに感謝し、これからも、愛され、期待され、楽しませるオーケストラであり続けたいと思います」と語る。地方都市を拠点に70年間、活動を続けてきた群響の足跡は、高崎の都市文化の象徴となっている。

高崎の新たな芸術拠点、群馬交響楽団の拠点となる「高崎文化芸術センター」の建設も進む。国内最高水準のホールで奏でる群響の響きも楽しみだ。伊藤さんは「歴史の重さを心に刻み、世界へ発信できるオーケストラになっていきたい。群響はこれからも進化し続けます」と意欲いっぱい。大友音楽監督は「世界の優秀な音楽家が高崎に集まってくるのが理想の姿。若い作曲家にチャンスを与えることも必要で、幅広い音楽活動を行っていきたい」と話し、新たな芸術創造への挑戦が始まっている。

大友直人音楽監督に聞く

Asking Maestro Naoto Otomo, Music Director of Gunma Symphony Orchestra

大友直人（群馬交響楽団音楽監督、指揮者）
桐朋学園大学を卒業。22歳で楽団推薦によりNHK交響楽団を指揮してデビュー。現在、群馬交響楽団音楽監督、東京交響楽団名誉客演指揮者、京都市交響楽団桂冠指揮者、琉球交響楽団ミュージックアドバイザー。また、2004年から8年間にわたり、東京文化会館の初代音楽監督を務めた。
第8回渡邊暁雄音楽基金音楽賞（2000年）、第7回齋藤秀雄メモリアル基金賞（2008年）を受賞。

―― 音楽のある街高崎と大友さんの出会いは？

大友　具体的な出会いは、群響を通してです。群響は、プロフェッショナルなオーケストラとして老舗で、更に、地方オーケストラではとても古く、創立70周年という驚くべき歴史がある。私は20代でデビューして、何度か群響に呼んで頂きました。それまでは東京交響楽団、日本フィル、大阪フィル、京都市交響楽団などとお付き合いがあり、高崎とはここ2年半で深く関わるようになりました。

―― 2013年から群馬交響楽団の音楽監督をされていらっしゃいますが、大友さんが群響の音楽監督になった決め手は？

大友　いくつかありますが、東京、大阪、京都、沖縄など、私は大きなまちと関わってきました。そういう都市に比べると、高崎は駅に降りた時から、空気感が違うほど小さな都市です。そこで長い間、オーケストラが育まれてきたこととそのまちに興味がありました。そしてもう一つは、群響のメンバーが群響にものすごく誇りを持っていることです。私が群響からお話を頂いた時に、「群馬県内ではオーケストラと言えば、何を置いても群馬交響楽団です。県民にとって最高のブランドは群響なんです」と群響のマネージメントの人がはっきり言いきられた。この人達にとって、本当に群響は命で、このオーケストラに掛けているのだなと、そのパッションに素直に感激しました。

―― 楽団の方の熱意に惹かれて、というのが決め手なんですね。群馬交響楽団の印象はいかがですか？

大友　歴史があるということは素晴らしいことで、終戦直後に高崎には音楽をやろうと集まった人達がいた。歴史を紐解くと昭和20年、ほんの数人の合奏団が始まりでした。でもその合奏団が70年間、活動し続けてきた。昭和30年代後半には、若き日の小澤征爾さんが来て指揮をしていて、今の群響のスタイルになっていた。その土壌があったということがすごいですね。

　オーケストラをプロフェッショナルとして運営していく、お給料を払う、社会的に独立した形で維持していくというのは大変なこと。高崎のまちのサイズでここまでしてきたことは大変なことです。

　ただ、これからどうやっていくかということが今、一番肝心なことではないでしょうか。群馬県民、高崎市民、そして我々が、高崎でどれだけ充実感のある、やりがいのある、夢のある音楽の現場を創っていけるかということに尽きると思いますね。

―― 音楽監督として、大友さんが何か具体的に思い浮かぶことがありますか。

大友　私が群響に来て一番驚いたことは、年に1回、定期演奏会のプログラムで市民合唱団と一緒の演目をやることですね。群馬交響楽団合唱団は、市民公募ですが、他のコーラスと違い人数がすごい。ご存知の通り、第九を歌いましょうというと人は集まります。しかし、それ以外の全く知られていないような曲をやる定期演奏会に300人を超える応募があって、皆さん練習なさる。いわゆる一般の方にはなじみのない曲をやります、と言ってもたくさん集まるのに感激をしています。

　ただ、私は必ずしも楽観的ではない。積極的に参加する人が確実にいらっしゃいますが、ある一定の所で閉じられてしまっている。ここが私としては残念で、群響やホールが本腰をいれて取り組んでいかなければならないのですが、これは日本全体の課題だと思います。

　昭和20年代から群馬県民は学校での群響の音楽教室を体験しています。群馬県民にとってはオーケストラ＝群響なんですね。だけれども、チケットを買って積極的に行こうという人はほんの一握りです。これをどこまで広げられるか。極端な言い方をすると、私はオーケストラもサービス業だと思っています。サービス業ならいつでも行けなければならない。レストランに例えたら、レストランが月に一度しか開いていなかったら都合で行けないですよね。お客様が行きやすいように、演奏会の数を物理的に増やしていって、あそこのホールに行くと、何かいい音楽が聞けるという環境を作りたいと思っています。

―― 群響の拠点は群馬音楽センターですが、今度新しいホールができます。どのように思っていらっしゃいますか。

大友　群馬音楽センターは1961年に建てられた、当時のモダンな建物として価値あるものですが、老朽化が見られます。バックステージ、楽屋とか水回り、ほとんど限界にきている。音響面も、残響が少ない、遮音が悪いホールです。そういう意味でも新しいホールは本当に素晴らしい音響になるはずですので、大いに期待しています。

　そして、具体的にお客様が足を運んでくださる、興味を喚起する、耳目を引く企画をプレゼンテーションしなければならない。今は情報が多く、群馬の方もいろんなコンサートを観ていますから、演奏会の中身は圧倒的なクオリティのものを創っていかなければならない。自分達が本当にやりがいのある面白い仕事の現場を実現することに集中するというのが、お客様にも熱意が伝わり喜んで頂けると思いますね。

―― 大友さんにとっての高崎スタイルとはどういうものでしょうか。

大友　音楽監督として、高崎には月に何度も来ます。何しろ東京から近いですから。近いですけど、行けば必ず泊まりますよ。なるべく、高崎の空気感や生活感を肌で感じたいですから。体も楽ですし、落ち着きます。まちも程よいサイズかもしれません。東京で歩いていても声を掛けられることはほとんどありません。ただ、高崎は圧倒的に声を掛けられる。これはすごい違い。それだけ、まちがコンパクトで、まちで起きていることを空気感として実感している。このスケール感が素晴らしいですね。

―― ご自身は高崎の音楽シーンを背負うという意味でどうとらえていますか。

大友　皆が面白がって熱中する、エネルギーとかムーブメントを作るということが重要だと思います。日常の活動から。今の時代のオーケストラが、多くの市民、将来のお客様を引き付ける活動は何かというと、現在進行形の今やっていることがこんなに面白いことなんだとお客様に伝わること。現代音楽、新作というのを恐れることなくどんどん創るということに尽きると思いますね。

　有馬大五郎さんという国立音楽大学の初代学長、NHK交響楽団で実質上の総監督の方が昭和20年代から仰っていることが今、私が言ったことと全く同じこと。「最終的には日本で何を創るか、それを持って世界の音楽界の中に日本の存在をしっかりと確立しなければならない」と仰っています。日本全体のことを考えるならば、これを高崎でやればいい。十分できると思うので、そういう活動を私はやっていきたいと思っています。

　そして、オーケストラのメンバーは、音楽をやるために全国から集まってきている。将来的には世界中から人材が集まって、そこでオリジナリティのあるエンターテイメントのあるどんなチームができるか、そういう時代になってきています。高崎のオーケストラをどこまで活性化できるか、エネルギーを集約できるか、ポイントを絞って、人を集め、高崎独自の企画を恐れることなく、一歩一歩、時間をかけてやってみたいと思います。

―― 力強い、グローバルな視点でお話を伺うことができました。ありがとうございました。

※2015年9月に渋谷ヒカリエで行われた『高崎博覧会』のトークイベントの内容をまとめたものを掲載しています。

高崎
文化遺産
シリーズ①

アントニン・レーモンドの傑作
群馬音楽センター

戦後の焼土から文化都市の建設に立ち上った高崎市民は「ひとつの都市にひとつのオーケストラとひとつの音楽ホールを」と、大きな理想を掲げ、群馬交響楽団を誕生させました。そして、群馬交響楽団を描いた映画「ここに泉あり」を契機に、音楽ホールの建設が市民運動として盛り上がりました。高崎市の年間予算規模が約8億円という時代に、市民の浄財3500万円を含む1億円の寄付を集め、総工費3億3500万円の巨費を投じて、昭和36年に群馬音楽センターが建設されました。群馬音楽センターの前庭には、「ときの高崎市民之を建つ」と刻まれた記念碑が建てられ、当時の市民の熱い思いを伝えています。

群馬音楽センターの設計は、高崎の文化的リーダー井上房一郎が、交友のあった世界的建築家アントニン・レーモンドを推薦しました。依頼を受けたレーモンドは設計モデルを3回作り直し、最終案を練り上げました。クラシック音楽だけではなく、歌舞伎など古今東西の演劇にも対応するため、設計は難航しました。間口の広いステージと客席の一体感は群馬音楽センターの大きな特徴となっています。

折板構造の独特な外観が美しいフォルムを描き、内部は大きな無柱の空間となっています。室内家具やホワイエの壁画、緞帳のデザインはレーモンド夫妻によるもので、特に2階ホワイエの壁全体に描かれたフレスコ壁画は、世界最大級のものとして貴重なものです。

群馬音楽センターは、群馬交響楽団の拠点として、また幅広い舞台芸術の場として人々に感動を与えてきました。今なお、現役のホールとして使い続けられており、平成10年には、DOCOMOMOジャパンから近代建築20選に選定され、高い評価を受けています。

高崎スタイルを語る
高崎は首都圏の山の手です。

宇津木妙子　絲山秋子　多胡邦夫　志尾睦子

高崎市は、古代においては世界記憶遺産の登録をめざす上野三碑や多くの古墳に象徴される「東国文化の発祥の地」として、江戸時代には中山道随一の商都として栄え、明治期には内陸にありながら横浜から世界との交易に目を向け、また戦後には全国の地方都市で初めてのオーケストラと公立大学と音楽堂を作るなど、高崎独自の歴史や文化や産業があります。

また、高崎市は内陸有数の交通拠点都市です。上越新幹線、北陸新幹線、関越自動車道、上信越自動車道、北関東自動車道の分岐点として、北信越（北陸・長野・新潟）と関東を結ぶ中心都市として、その拠点性が注目されています。

高崎市はこのような歴史や文化や立地を活かして、「新しい高崎」の都市づくりをめざしてエキサイティングに動いています。

東京駅から新幹線で50分。練馬から高速道路で60分の高崎市は、鎌倉・湘南地域とほぼ同じ時間の立地にあります。高崎は鎌倉・湘南と同じように豊かな自然や住みやすい環境と質感の高い文化を持つ地域です。

高崎市は「首都圏の山の手」と呼ばれる都市づくりを進め、ビジネス、住環境、芸術文化、スポーツ、食文化など、高崎の都市としての個性や魅力、ブランド力を磨き「高崎スタイル」の創造をしようとしています。

このような高崎のまちを拠点に全国、世界に活躍の場を広げている「高崎人」4人が「高崎スタイル」「高崎イズム」を語ります。

ソフトボールがつなぐ高崎との絆

公益財団法人日本ソフトボール協会副会長
宇津木妙子さん

『よそ者』からのはじまり。大切にしてきたのは郷土愛、ソフトボール愛、企業愛

ユニチカ垂井の現役時代、高崎の横尾製作所と決勝戦で当たったことがとても印象深く残っているという宇津木さん。横尾製作所はその後太陽誘電にチームが変わり、スポーツ選手としてその変遷を見てきた。現役引退後、当時の日立製作所高崎工場から招かれ、コーチに就任することになった。岐阜県垂井から実家の埼玉に戻り、高崎の地で12名の選手と一部リーグをめざし走り出した。コーチ就任時は全くの『よそ者』だったというが、その後監督となり夢の実現に向けて邁進する中で、周囲も自分も『よそ者』意識が変わって来たという。従業員をはじめ地域の協力は強大で、高崎は他の都市と比べてもスポーツ支援が強力な土地柄だと実感した。だからこそ、企業スポーツとしてこのチームがどうあらねばならないかを常に考えて来たという。「始めた当時は上ばかりを目標にやれたのである意味楽でした。周囲も勝ったら喜んでくれる。問題はそこからです。チームが力をつけてくると、明確な目標として何をやればいいのかをその都度選手に伝えました。ひとつひとつ山登りみたいにチームを作ってきたのです」。そう語る宇津木さんの言葉に、厳しくストイックな姿勢で選手と向き合って来た背景が見える。

「日本では、野球はメジャーで、ソフトボールはメジャーではない地味なイメージがありました。その中で、高崎を中心にビックカメラと太陽誘電さんが切磋琢磨して日本一、世界に向けてやっているのは大きい事です。愛知県にはトヨタグループでチームが3つあり、いつもライバルがいて成長できます。当時、私も誘電さんがなければこんなに頑張れなかったと思います」。

7回2アウト、4−0で勝っていたのに最後に逆転負けしたことがあった。勝負の厳しさを改めて知り、勝つ喜びはもちろんのこと、負ける悔しさは、自分たちだけのものではないことも痛感した。選手と従業員、そして何より地域の人達と共にあるのだと。地域郷土に支援されなければ企業スポーツとして成り立たない。選手達にはそのことを常に意識するように指導した。郷土に自信を持ち、高崎市民の代表、企業の代表として自覚を持つようにと。チーム名に高崎が入っていることは非常に大きなことで、世界にその名を向けていく使命感が自然と生まれてくる。郷土愛、ソフトボール愛、企業愛が、選手と地域を結びつけていくのだと実感している。

これまで数多くの企業チームの廃部を見てきたという宇津木さんだが、これほどまで同じ地域で引き継がれていくケースは高崎をおいて他にないと言う。一つは、ナショナル木材から横尾製作所そして太陽誘電へ、もう一つはルネサス高崎（旧日立高崎）からビックカメラ高崎へとチームが引き継がれた。廃部になって選手がバラバラになる姿を他で見ているだけに、チームがほぼそのまま、その地域で存続していけることのありがたさ、地域の理解度の高さを身にしみて感じているという。それは選手たちのプレーにも反映される。皆、使命と責任を感じながら努力を惜しむことがない。それを裏付けるかのように今年度、日本女子ソフトボールリーグにおいて、ビックカメラ高崎は創部1年目にして初制覇を成し遂げた。地域への恩返しの気持ちが後押しをしたと考えても違いはないだろう。

ピンチを凌ぎチャンスをどういかすか。チームだけでプレーをしているのではない。

宇津木さんにとって、ソフトボールは人生そのもの。プレイボールが掛かったら、ピンチがあり、チャンスがある。ピンチを凌ぎ、チャンスをどういかすかは、そのチームの力だけにかかっているわけではないのだ。チームを超えた個の力、ベンチの役割、応援する人、それらが一体とならないと勝てない。そのことをソフトボールから学んだと宇津木さんは語る。だからこそ、後世にもそれを伝えていきたいと思っている。情報も物資も豊かな現代、子どもたちに弱さを感じてしまうことが少なくないという。何か一つのことに集中し、達成する力を養う機会が薄れているのかもしれない。一つの目標に向かってがむしゃらにやるような環境は、心を強くし生きる力を育んでくれるものだ。NPO法人ソフトボール・ドリームが力を入れて取り組んでいることに、現役選手と子どもたちの交流事業がある。スポーツで活躍する選手と一緒に汗を流すことは子どもたちにとって貴重な機会だ。憧れを強め、あんな風になりたいと思える大人が身近にいることは素敵なこと。辛いことがあっても、こんなに楽しいことがあると、スポーツを通して伝えていきたいと力をこめる。また、今年世界野球ソフトボール連盟の理事になり、日本のみならず、世界規模でのソフトボールのあり方を考える立場となった。応援され親しまれる組織を作っていくために、何が出来るのか。現場に行き、自分の目で見て、周囲の声を聞き、一緒に体を動かしながら、さまざまな声を届けていきたいと思っている。

人とのつながりが世界を広げる

地域とコミュニケーションを図ることは、地域活性につながっていく。1部リーグをめざしてスタートした高崎での活動は、確実に実を結んでいる。日本代表メンバーの過半数を高崎の2企業チームメンバーが占め、それは市民の誇りへもつながっている。シドニーオリンピックの後、高崎駅から市役所までオープンカーでパレードをした際、沿道には子供から大人まで小旗を振る人々で埋め尽くされた。「感動をありがとうと言われた時は、嬉しかった。忘れられないですね」。

高崎での活動も31年を迎えた。群馬の空っ風にあおられて頑張る力が育まれたり、かかあ天下といわれる土地柄で女性がしっかりと暮らしを守っていると感じてきた。風土が人を作り、地域を形成していくのを肌身で感じている。「この自然環境の中で育まれる人情味のある人たち。最後は人だと思います。人とのコミュニケーションを図ることは、自分が自分らしく生きられるということ。すべては人のお陰」。

2020年東京オリンピックでの採用種目への期待も高まっている。ソフトボールシティ高崎から世界へ向けての躍進は始まっている。

宇津木妙子
（公益財団法人日本ソフトボール協会副会長）

高校卒業後に実業団チームで活躍。選手として引退後には日立高崎女子ソフトボール部監督に就任し、当時3部のチームを2年で1部に昇格させ、1990年には優勝するなど強豪チームへと成長させた。1997年には日本代表監督に就任し、シドニーオリンピックで銀、アテネオリンピックで銅メダルへ導いた。現在はNPO法人ソフトボール・ドリームを立ち上げ、ソフトボールの素晴らしさを日本及び世界中に伝えている。

※2015年9月に渋谷ヒカリエで行われた『高崎博覧会』のトークイベントの内容をまとめたものを掲載しています。

高崎を鋭く分析する県外からやってきた高崎人

小説家
絲山秋子さん

人情は全く違う考え方を持っている人をつなぐための技術

東京出身の絲山さんがなぜ高崎に住まいを持つことになったのか。それは会社員時代の転勤に遡る。約2年の高崎生活ですっかり愛着が湧いてしまい、次の勤務地へ引っ越す時には、車のルームミラーに映る山が段々小さくなっていくのが悲しかったほどという。小説家になり、好きな土地に住みたいと高崎に思いを馳せた。2003年にデビュー作を出し、すぐに群馬が出てくる『第七障害』を書いている。2005年に思い切って高崎にアパートを借り移住した。土地に惹きつけられた魅力は上毛三山とその風土。「山を見れば自分が今どこにいるのかがわかるし、真っ暗でもGPS的感覚で赤城山、榛名山の位置がわかる。山が見えないと寂しい」という絲山さん。自然の恩恵であるおいしい水、旬のおいしい野菜ももちろんのこと、人情に厚い土地柄も魅力だと語る。

交通の要衝として栄えた高崎だから、人が行き交う場所ゆえの特性があると感じている。旅人を親切に迎え入れ、もてなすという気風だ。それが人を惹き付けていると語る。「高崎には古代から、いくつもの街道があります。鉄道路線では、北陸や長野、新潟へ行く分岐点です。各地から高崎を通って目的地へ行くわけですが、その道中で高崎を気にいり、住み着いてしまった私みたいな人たちがいるんですね。元は違う土地で派生した苗字が、ここで繁栄していたりするのはそういうことなのだと思います」。

また、歴史的価値の高い古墳が数多く残っていることも人情と結びついていると考えている。高崎の人にとって古墳は遺跡として眺めるものではない。散歩をしたり、遊んだりと、日常生活に入りこむ身近な場だ。それが1200年たっても崩れないのには、かつての技術交流が大きく関与している。「大陸や関西など、違う土地からの新しい技術を取り入れているわけですが、それは人付き合いがあったからこそ。人情というのも、全く違う考え方を持っている人をつなぐための技術なのではないでしょうか」。

その技術を絲山さんは体得している一人だ。好きになった土地のことを隅々まで知りたいと、歴史や地理、物産や、方言までありとあらゆることで群馬通、高崎通になった。周囲の人からは誰よりも〝高崎人〟と言われるほどだ。「初対面の人から〝高崎を気に入ってくれてありがとう〟〝住んでくれてありがとう〟と言われて、ほろっと来ることがよくあります。だけどこれは他の都市ではなかなか表現されないことです。今までの赴任先の中でも高崎は特に人情があります」。郷に入れば郷に従え、というよりは人情が人情を呼び自然と根が生えていくということかもしれない。

まちは目的地ではなく機能でありシステム

〝交通の要衝〟というと、通過点というイメージがあるが、絲山さんの言う要衝は少し違う。「信号をどちらに行くかで、行き先が変わる。高崎駅が交通の要衝ではなく、群馬のあらゆる場所が交通の分岐なんですよね」。分岐点は言い換えれば、他所と他所をつなぐ拠点になる。観光と考えると、まちが目的地でなければならないと考えがちだが、高崎の機能性は大変重要な観光なのだ。機能的でコンパクトなまちだから、滞在型リゾート地と考えて、地の利を活かした楽しみ方が出来ると感じている。「群馬の森とか観音山、市役所の展望も見て、倉渕や、吉井へ向かう。新町の紡績所を回って市内観光をしたら草津温泉へ行って、高崎に帰って来て泊まる。翌日は桐生へ行ってウナギを食べて、また帰って来る。しゃれた所に行きたいとなったら、軽井沢に行ってまた帰ってくる。新潟、長野、秩父に行ってもいい。高崎を拠点にして、どこにでも行けます」。

一つの観光プランや見所を提示できないと、観光地としての魅力が薄くなってしまいそうだが、それも絲山さんからすると違うようだ。「一つのPRに安心しきってつまらなくなったまちは全国にいくらでもあります。一本調子だった観光を見直して、より面白く見せようという取り組みに、今各地が目を向けていますね。高崎の場合、移動するのもローカル線、SL、レンタカーと選択肢がある。野菜は豊富だし肉もおいしいし、魚はワカサギがおいしい。オール群馬でサンドイッチ、オール高崎でサンドイッチが出来てしまう。なんでもあるから、旅する人が常に選択できるわけです。選択肢があることに気づくことが楽しくなる秘訣です」。あとはそれをどう伝えていくか、それが鍵になるようだ。

絲山秋子のゴゼンサマ

群馬や高崎を舞台にした作品が世に出るのは読者としても市民としても嬉しいところだが、絲山さん独特の切り口で高崎の街並みを感じる場がもう一つある。今秋から放送開始となったラジオ高崎の番組『絲山秋子のゴゼンサマ』だ。毎週金曜日、新幹線の始発時間に合わせた朝5時45分から、高崎駅のスタジオで生放送をしている。「高崎駅で朝っぱらから作家が喋ってるよって、出張先に話題を持って行ってもらえたらなと思いまして。種を鳥の羽に付けたり、食べて貰って子孫を増やしていく植物がありますけれど、そんな感じです。双方向に人をつなぐということも、ラジオの役割だと思っています」。科学や音楽や車など自身の好きなことを話題にもするが、新しいものを常に取り入れていきたいと考えている。それは、新し物好きの県民性を考えてのことだ。なぜ新し物好きなのかの持論がある。それは群馬の天気。「晴れていたかと思うと、雨がどっと降る。一日のうちで天気がすごく変わりますが、高崎の人は、その変化を楽しんでいるように思えます。適応力が高いとも言え、それは新し物好きにつながっている気がします」とは絲山さんらしい分析眼だ。新コーナーを作ることでリスナーに楽しんでもらい、声をたくさんもらうことで、また新しいアイデアを紡ぎ出す。変化に富んだ楽しい番組になることだろう。そして生放送だからこその、高崎の空気感を全国各地にいるリスナーに届けたいと思っている。

絲山さんのまちに対する自由で豊かな発想力こそが、高崎の魅力の一つかもしれない。

絲山秋子
（芥川賞作家）

1999年に小説を書き始め、2003年「イッツ・オンリー・トーク」で文學界新人賞を受賞してデビュー。2004年「袋小路の男」で川端康成文学賞、2005年「海の仙人」にて芸術選奨文部科学大臣新人賞、2006年には「沖で待つ」で芥川賞を受賞する。他にも「ニート」、「ばかもの」、「末裔」など著作は多数で、最新作は「離陸」。高崎経済大学理事で、非常勤講師もつとめる。

※2015年9月に渋谷ヒカリエで行われた『高崎博覧会』のトークイベントの内容をまとめたものを掲載しています。

高崎で生まれた音楽が世界と時代をつなげて行く

作曲家・音楽プロデューサー
多胡邦夫さん

音楽に暖かいまち・高崎を実感した少年時代

音楽をはじめたのは中学生の時。アルフィーの曲に涙が出る程感動し、高見沢氏に憧れた。お年玉でギターを買い、毎日練習に励んだ。高崎の中心街、慈光通りにあったロックイン高崎に通い、名物店長にもずいぶんかわいがってもらったという。当時はBOØWY全盛期。80年代日本ロックを牽引した高崎市出身の伝説的バンドだが、そのメンバーの名前が店長から出ることも少なくなかった。放課後店に行くと、「さっきまで布袋君がいたんだよ」ということもあったという。「それだけでも、自分達も追いかければプロになれるんじゃないだろうかと。高崎ではそういうことが起こるんですね。近くで触れていたので、毎日バンドをやっていて楽しかったです」。

ギターを買った時、音楽で人を感動させる仕事につくことを決めたという多胡さんは、音楽活動に邁進する。高校生になると高崎まつりやえびす講などで演奏する機会を得るようになった。大人たちが、自分たちアマチュアバンドのためにステージを作ってくれたのだ。日頃の音楽活動では自分たちでかき集めた数十人が精一杯の観客だったところが、まつりでは2000人規模の前で演奏することになり、「良い勘違いが出来たし、勇気がもらえた」と振り返る。問題が起きると、大人たちが周辺の店舗や家に一軒一軒頭を下げに回ってくれた。こういう大人たちのお陰で自分たちは音楽をやらせてもらえる。高崎は音楽にとても暖かいまちなんだと肌で感じていたという。

二十歳で東京に出て音楽の道に突き進んだ。曲を作りいろいろなレコード会社に送り続け、その後エイベックスと契約を結んだ。今や押しも押されもせぬ名音楽プロデューサーだ。そんな多胡さんは、数年前に地元高崎に戻って地方初の新しい音楽スタイルを提案・実現した。

音楽のある街 高崎だからこそ、出来ると思ったスタジオ

TAGO STUDIO TAKASAKIは、プロフェッショナルなアーティストやプロデューサーのニーズに対応するハイスペックなレコーディング環境を整えた施設だ。高崎市が運営する行政施設であり、多胡さんが管理責任者として業務に当たる。設立の背景には、音楽製作環境の変化がある。デジタル化も加速し、音源はストリーミング配信される時代。だれもが手軽に音楽を手に取れるシステムはリスナーにとっては好環境だが、一方でCDの販売率を低下させ、経済的側面には影響を及ぼす。つまり、製作者・アーティストに取っては辛い時代なのだ。製作への予算はどんどん削られ、手間暇も経費もかかる生の楽器の音は録れなくなってきている。そんな時代だからこそ、高水準の機材環境を整え、音楽を高崎の地で生み出してもらいたいと考えた。その利用料金は安価にし、その分を音楽活動で支払ってもらう。無料のコンサートを開いて市民を招待したり、ワークショップの開催などで、地域に還元してもらうのだ。これは画期的なシステムと言える。

開館して1年が経った。高崎という土地柄からか、クラシック、ジャズの方の利用も多い。レコーディングスタジオとしては、こうした音楽ジャンルの幅の広さは特徴の一つと言える。利用率は高く、予約が常に埋まっている状態だと言う。東京から100キロという高崎の立地も、仕事のモードを切り替えるのにちょうど良い距離感だと多胡さんは感じている。喧騒とした都会からのどかな地方都市へ。自然豊かな景色もひろがりながら、機能的なコンパクトシティ高崎は好評だという。

「コンサートを一日やって帰って行くというのは、どこでもできることで、これは特産品を隣の県からもらってきて、売っているという状態。レコーディングというのは三日とか五日とか、長い時は一カ月かけることもある。それだけ魂を込めて曲を送り出す作業です。まさに高崎のまちから生み出した音楽という言い方ができるのは、他にはない素晴らしさだと思います」。

風土や空気感は目に見えないからこそ、生み出すものにはその魂が自然と宿って行く。高崎が居心地の良い地でなければ、良い音楽も生み出されないということでもある。

生音レコーディングが大切な研鑽の場

良い音楽を生み出すためには、技術や経験を積む場がなければならない。アーティストにとってライブがその場のように思えてしまうが、実はレコーディングが最も大切な研鑽の場なのだと多胡さんは言う。「生音でレコーディングする場所がないとミュージシャンが育たない。レコーディングするというのが一番、ライブよりも技術を必要とするので、そういう場で皆、勉強して、レベルアップしていく。その環境が無くなってしまうと、若手のミュージシャンが育たない。レコーディング会社の体力も落ちていて、若手の技術者を育てられない。次世代を支える音楽家が育ちにくい環境にあるんです」。

人間が演奏する生音を記録することで、次世代へ音をつなげて行く。音楽文化はそうして発展し継承して来た。その文化を高崎の地で確実につなげて行きたいと思っている。

住みやすいまちに楽しさを振りまくのが自分の仕事

音楽のある街高崎で生まれ育ち、東京に出てプロになった多胡さんは、再び高崎に戻り日本の音楽シーンの中枢で活躍し続ける。地方都市高崎にどんな可能性を感じているのだろうか。「これから3年、5年後というのがとても楽しみなまちだと思いますね。新しいホールもできますし。僕の仕事は住みやすいまちを作ることではなく、住みやすいまちに楽しさを振りまいてあげることだと思っています。今後さまざまな施設やホール、体育館ができることによって、いろいろなことがエンターテイメントで表現できると感じています。今よりも10倍100倍楽しいまちにしていけるのではないかなと期待感がすごくあります」。

音楽には人の心に入り、気持ちや人生を一瞬にして変えてしまう力がある。一人一人の心の中に新しい風を吹かせることによって、全体の大きな流れを変えられるような愛のある音楽を創りたいと語る多胡さん。豊かな自然と、暖かな人々の気風、人情に支えられたこの地で、時代を越えて受け継がれるべき音楽性、音楽文化を育くむことに意気込む。TAGO STUDIOが拠点となって日本の音楽シーンを、世界に発信する日もそう遠くはないだろう。

多胡邦夫
（作曲家・音楽プロデューサー）

高崎市出身・在住。1973年生まれ。作曲家・音楽プロデューサー。浜崎あゆみ、hitomi、Every Little Thing、AKB48などへ楽曲提供。エイベックス・マネジメント株式会社所属。株式会社TAGO FACTORY.代表。TAGO STUDIO TAKASAKI運営責任者。

※2015年9月に渋谷ヒカリエで行われた『高崎博覧会』のトークイベントの内容をまとめたものを掲載しています。

映画の街を支える高崎の土壌

シネマテークたかさき総支配人
志尾睦子さん

高崎映画祭との出会いで東京に対する劣等感を微塵も感じなくなった

群馬県内初のミニシアター・シネマテークたかさきは2014年で開館から10年を迎えた。支配人として映画館を切り盛りしてきた志尾さんの映画との最初の関わりは高崎映画祭だった。学生時代にボランティアスタッフとなり、数年後にはプログラムディレクターとして上映作品の選出を担うようになった。映画館を作ることとなり、創設者、故茂木正男さんらとともに奔走した。こう聞くと生粋の映画好きなのだろうと思うのだが、志尾さん自身の映画との本格的な出会いは20歳を過ぎてからなのだという。学生時代に高崎映画祭のボランティアスタッフになったことは、大きな転機だった。

東京に出なければ何者にもなれないと思っていたという志尾さん。いわゆる東京志向が強く地元にいることに劣等感を感じていた時期もあったという。それが高崎映画祭に出会って、180度変わった。ラインナップの充実度に驚いただけでなく、文化芸術に対する意識の高さ、活動の熱意に素直に感激した。高崎映画祭を通して、高崎がどんな活動をしているところなのか、行政の取り組みや、市民活動の充実さを知ることとなった。映画上映に没頭し気がつけば映画館の設立に関わっていた。

群馬交響楽団と映画『ここに泉あり』がもたらしたもの

シネマテークたかさきは、シネコンでは上映されないような映画を選りすぐって上映する。興行館ではあるが、地域の映画映像文化の発展と育成、他機関との連携を常に意識している。「まちなかの映画館だからこそ、映画を丁寧に、お客様にお届けしたい。顔の見える映画館でありたいと思っています」。映画全体が斜陽の時代、経営は厳しいが、周囲の理解と支えで充実した映画上映活動が続けられているという。「音楽も映画も、他の芸術分野もそうですが、高崎は理解が深い土地柄だと思います。加えて、一生懸命活動している人を周囲が温かく見守る市民気質がある。他県の関係者からは、映画祭のように補助金をもらって活動していると制約やラインナップに縛りが出てくるでしょうと言われることがあるのですが、高崎映画祭に関してはそんなことは一度もない。映画館についても、様々に行政からの支援を受けていますが、ロマンポルノをやっても理由があって上映していると理解してもらえます。そんなことは稀のようですから」。シネマテークたかさきで日活ロマンポルノ特集を上映した際、地方都市での開催でこんなに数字が良かったのは高崎ならではですね、と配給会社にも驚かれた。

文化を育む土壌が脈々と続いているのには、群馬交響楽団と映画『ここに泉あり』の存在が大きいと感じている。「当時の話を聞くと、今でもなかなかできないような、市民総出ともいえる協力体制で撮影が進められたことがわかります。その熱意と盛り上がりが映画にしっかりと映っているからこそ、時代を超えて語り継がれる名作となった。群響を育てた高崎市民には、芸術、文化を育てる気概がある。その自負が受け継がれているのではないでしょうか」。

映画の循環サイクルを引き受ける使命 映画の街・高崎

映画映像制作を地方都市で円滑に進行するため、制作サイドに情報提供してサポートする、フィルムコミッション（以下FC）がその名称とともに日本に取り入れられたのが2000年。ほどなくして高崎市観光課内に高崎フィルム・コミッション（以下高崎FC）が設置された。昨年、このFC業務はシネマテークたかさきへと業務移管された。「『ここに泉あり』はFCという考え方がない時代に、まさしくその精神が生み出した作品で、先駆的な取り組み。その後、FCができるまでは高崎映画祭がその役割を担っていました。当法人がその業務に着手するのは当然の流れとはいえ、出だしはできませんでした。高崎FCが10年の実績をつみあげ、礎を作ってくれたところで、引き継げるのはありがたく幸せなこと」と志尾さんは語る。事実、業界内では市が運営していた高崎FCの評判はすこぶる高いという。行政から民間への懸念を抱く人もいたが、現在も行政の強力なバックアップ体制のもとFC業務が引き継がれているため、今では民間と行政の相乗効果を期待する声の方が多くなったという。

今夏、角川映画40周年記念企画映画『セーラー服と機関銃ー卒業ー』（2016年3月5日公開）の撮影を受け入れた。撮影は約一ヶ月。ロケハンから数えれば約2ヶ月半に渡る長丁場だった。70名ほどの映画スタッフが高崎に滞在し、地域全体の協力体制のもと撮影を敢行した。経済効果も大きいが、地域住民がエキストラや撮影協力で参加することでまちが活気づくのが大きな効果と感じている。その雰囲気は撮影側にも浸透するため、気持ちよく映画制作が進み、良き作品が生み出されるのだと実感した。そして全国で上映され、観客が高崎の風景とともに映画を楽しむのが想像できる。これは映画人としてこの上ない喜びを感じると志尾さんは言う。

映画の入り口から出口までを一つの団体が網羅するというのは全国的にも他に例をみない。「映画を作り、上映し、観てもらい、興行収入を得て、資金を回収し、次の映画制作につなげるというのが正しい映画の循環サイクルだと思っています。その一部ではなく、全体像の中に自分達の活動がある。やりたいと思っていたことが出来始めていると実感があります」。行政と地域の理解がなければ到底できないことが、高崎ではできる。それが映画業界全体の希望になる。また、映画上映の次なる夢に海外作品の自社配給をあげる。「上映権のある映画を東京の次にやるのではなく、世界にあるいい映画をこの目で探して来て、ダイレクトに配給し高崎から発信したいと思っています」。

映画の街・高崎という言葉に何より勇気をもらっている。「高崎の特徴のひとつに、映画を取り上げて頂けることも嬉しいことで、そこに貢献したい、恩返ししたいという気持ちもあります。そうやってステップアップしていかないと、今までやってきたことが嘘になってしまいます。今こそそれをやる時ではないかと思っています」と締めくくった。

志尾睦子
（シネマテークたかさき総支配人）

群馬県立女子大学在学中にボランティアスタッフとして高崎映画祭の活動に参加。群馬県内初のミニシアター「シネマテークたかさき」の総支配人、来年30回目を迎える日本を代表する映画祭である高崎映画祭総合プロデューサーとして活躍。